

第一部: HTML (ハーベスト・タイム・ミニストリーズ) → 聖書塾→聖書フォーラム」による信徒流出問題とは何なのか

1. 米国の基督教メディアの分析・評価とHTML
2. 米国におけるディスペンセーション主義基督教シオニズムの興隆とHTML
3. 「ウィキペディア」におけるHTMLの紹介—その歴史と方向転換の経緯、今後の目標
4. 2019年七月の「聖書フォーラム分布図」
5. 農地ならぬ、羊の囲い込み運動 (エンクロージャー・ムーブメント)
6. 聖書フォーラムとは—達成方法 2. 自立への道 — 教会の病理現象 (FATIM) からの脱却 (流出) によって

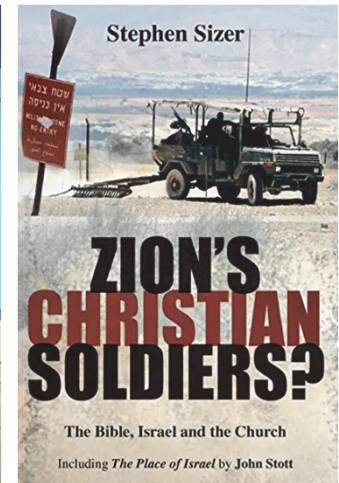
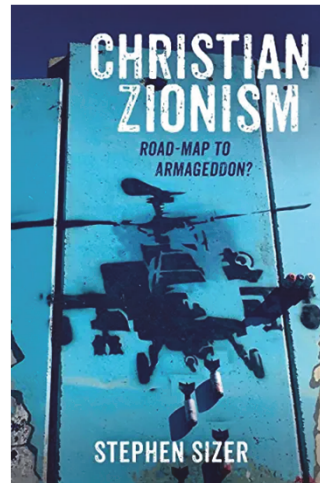
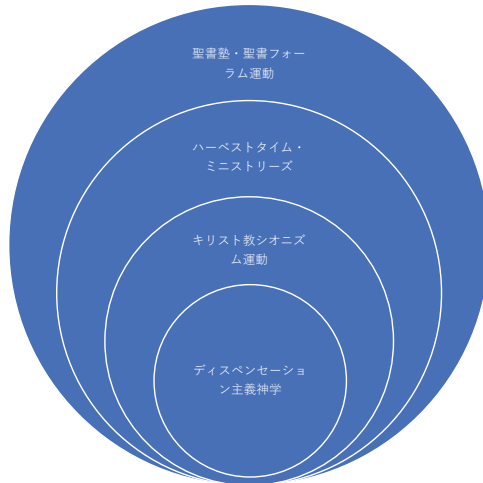
1. 米国のキリスト教メディアの分析・評価とHTM



1. はじめに、ハーベスト問題を考える上で、参考となる本を紹介したいと思います。生駒孝彰氏の『ブラウン管の神々』と『インターネットの中の神々』です。
2. 米国における、ラジオの時代→テレビの時代→インターネットの時代のキリスト教番組の変遷が記されています。
3. 五人の著名な伝道師として、「政治的言動」のパット・ロバートソン、「癒しのミニストリー」のオラル・ロバーツ、「可能性思考」のロバート・シューラー、「健康と富の神学」のジム・ベーカー、「洗練された音楽」のジミー・スワガードと、人物と番組の特色が紹介されています。その中の幾人かは、性的スキャンダルや金銭的スキャンダルで失墜しています。
4. また、二人の巨人として、ジェリー・ファルウェルとビリー・グラハムと落ちた巨人としてレックス・ハンバードが紹介されています。
5. そして、テレビ伝道の実態の分析・評価がなされ、視聴総数が飽和状態になっていく中で、番組の急増に伴う過当競争、視聴者の争奪戦、献金の争奪戦等の問題とそれに伴う番組内容の「視聴者主導・視聴者ニーズ中心の編成、特色のある内容の必要」が取り上げられています。
6. キリスト教メディア・ビジネスの世界での激しい戦いが、米国でみられてきたように、日本の人口の1%程度といわれるクリスチャン人口とその周辺のキリスト教求道者層の中での「キリスト教メディアとしてのHTM」の経済的サバイバルの歩みは大変なことであったと思われます。
7. 少子高齢化社会で、クリスチャン人口の減少も予想される中、一般社会も、教会も、大変な時代に突入しつつあることは明らかです。

8. そして、元々財政基盤がぜい弱な日本の基督教メディアにとって、魅力的で個性的な番組やビデオやスポーツ等、多様多彩なメディア競争の中で「視聴者数と献金額を維持していく」ことは、大変なことだと思います。
9. そこで、「超教派的な共通項を内容」とするテレビ伝道から、「視聴者獲得と献金獲得の新規プロジェクトとしての可能性」を、“ディスペンセーション主義神学”の原理的前提の徹底を“錦の御旗”に掲げることの中に見出されていったものと思われます。

2. 米国におけるディスペンセーション主義キリスト教シオニズムの興隆とHTM



1. J.R.W.ストットも推奨している、スティーブン・サイザー著『キリスト教シオニズム』と『シオンのクリスチャンの兵士たち』の中で、ディスペンセーション主義神学に立脚するキリスト教シオニズム運動についての分析・評価があります。その要旨は、拙著『福音主義イスラエル論 I・II』で紹介しています。
2. ここで、今回のテーマとの関連で、「キリスト教シオニズムの意義」の箇所から、ひとりの牧師を紹介します。
3. [ローリー・ハギーによる最近のスピーチから、動きとその戦略の趣向をお話ししましょう。
4. Hagee は、テキサス州サンアントニオにある 18,000 人の会員を擁する福音派教会であるコーナーストーン教会の創設者であり、主任牧師です。
5. Hageeは、毎週160 のテレビ局、50 のラジオ局、および 8 つのネットワークを使用して、世界中の推定 9,900 万世帯に全国的なラジオおよびテレビのミニストリーを放送しています。
6. 2006 年、彼は他の 400 人のキリスト教指導者の支援を受けて、クリスチャン ユナイテッド フォー イスラエルを設立しました。
7. わたしは、米国のキリスト教メディアにおける「視聴率、献金獲得競争」の市場での、「ディスペンセーション主義神学に立脚するキリスト教シオニズム運動」の興隆が、参考になっていると思います。
8. キリスト教メディア同士の中での視聴者獲得・献金獲得競争もありますが、この世のメディアとの間の視聴者獲得の戦いの上でも、中川氏が「イスラエル」に目をつけられたのだと思います。
9. キリスト教シオニズムの中には、ディスペンセーション主義を神学的基盤としているものが三

つあります。黙示的ディスペンセーション主義キリスト教シオニズム、メシヤニック・ディスペンセーション主義シオニズム、政治的ディスペンセーション主義キリスト教シオニズムです。ディスペンセーション主義とは異なり、バランスのとれた健全なキリスト教シオニズムもあります。

10. HTMLは、ハル・リンゼイ著『地球最後の日』やティム・ラヘイ共著『レフト・ビハインド』等にもみられる黙示的ディスペンセーション主義キリスト教シオニズムの傾向をもつ再臨運動だと思います。

11. また、メディア戦略として「イスラエル」に特別な価値を見ておられる中川氏は、メシヤニック・ディスペンセーション主義キリスト教シオニズムのフルクテンバウム氏とその著作・ビデオ等を効果的に活用しておられるように思います。

3. 「ウィキペディア」におけるHTMの紹介—その歴史と方向転換の経緯、今後の目標

ウィキペディアでの紹介



ハーベストのホームページ



1. HTM問題を正しく理解するために、風聞だけでなく、米国との関係や日本での歴史と方向転換の経緯、今後何をなさそうとおられるのかを知ることが大切です。
2. そのときに、インターネット上の辞典である「ウィキペディア」や、ハーベストのホームページは役に立つと思います。
3. そこでは、ハーベストの働きが以下のように紹介されています。
4. [ハーベスト・タイム・ミニストリーズ (Harvest Time Ministries) による「聖書研究から日本の霊的覚醒を図る」、「聖書の解説講義、ネット配信、文書活動」。
5. 「インターネットの広報力に着目した、聖書に関する動画配信」。
6. 「過去の講義を含めた1400本以上の動画の「メッセージステーション」での無料視聴。
7. ハーベスト・タイム・ミニストリーズの主筆として、「ヘブル的聖書解釈による信徒訓練を目指して日々のディボーション・テキスト、『clay (クレイ)』の刊行」。
8. 再臨運動を重視し、2010年に「1.日本のリバイバル、2.ユダヤ人の救い、3.メシアの再臨をテーマとして、第一回ハーベスト再臨待望聖会が開催」された。
9. キリスト教伝道の本来的な目標に立ち帰り、「理論的な解釈学に基づく正しい聖書理解をもつ信徒を育てる」為に、信徒訓練の場である聖書塾の運営と、塾生が全国各地で行っている聖書フォーラム運動のサポートへ活動の機軸を移す。

5. 農地ならぬ、羊の囲い込み運動（エンクロージャー・ムーブメント）

多様な農地は囲い込まれ、大規模な牧場とされていった



- 英国の産業革命以前には「細かい土地が相互に入り組んだ混在地制における耕地を統合し、所有者を明確にした上で排他的に利用すること。特にイギリスにおいて16世紀の第一次の農地の囲い込みは羊毛産業のための牧羊目的で個人主導で行われました」。

1. 「ハーベスト問題」とは一体何なのでしょう。
2. 「HTM→聖書塾→聖書フォーラム」運動と並行して全国各地の教会で起こっている“信徒流出”現象は、どのように理解し、説明できるのでしょうか。
3. わたしはこのような表現することはできるのではないかと考えています。
4. これは、「HTMによる羊の囲い込み運動」なのではないかと。
5. 英国の産業革命以前には「細かい土地が相互に入り組んだ混在地制における耕地を統合し、所有者を明確にした上で排他的に利用すること。特にイギリスにおいて16世紀の第一次の農地の囲い込みは羊毛産業のための牧羊目的で個人主導で行われました」。
6. 2010年までのテレビ伝道から、インターネット神学教育へのシフトに際して、全国各地で起こり続けている「既成の諸教会からの“HTM→聖書塾→聖書フォーラム”への信徒流出」現象は
7. 長年諸教会の内外で培われた求道者や信徒のHTMシンパ層に対し、「教会の垣根を壊し、シンパ層の羊に対するHTMの所有権を主張する羊の囲い込み運動（エンクロージャー・ムーブメント）」と、類比して理解できるのではないのでしょうか。
8. わたしは、ここに「それぞれの歴史的ルーツと共通の福音理解に根差した、神の家族としての地方教会」と「教会を超えた機能を果たし、地方教会に対して補完的役割を担う超教派機関」との信頼関係の破綻をみます。

6. 聖書フォーラムの”達成方法” 2. 自立への道 — 教会の病理現象 (FATIM) からの脱却 (流出) によって

- (1) 形式主義 (FORMALISM) から自由 (FREEDOM) へ
 - ・ キリストにある自由
 - ・ 愛を働かせるための自由
- (2) 権威主義 (AUTHORITARIANISM) から自治 (AUTONOMY) へ
 - ・ 自給伝道
 - ・ 自主運営
- (3) 伝統主義 (TRADITIONALISM) から変革 (TRANSFORMATION) へ
 - ・ ユダヤ的聖書解釈
 - ・ 神の国の視点
- (4) 内向き志向 (INWARD-LOOKING) から外向き志向 (OUTWARD-LOOKING) へ
 - ・ キリスト教信仰を世界観としてとらえる。
 - ・ キリスト教信仰を歴史観としてとらえる。
- (5) 会員志向 (MEMBERSHIP - ORIENTED) から流動志向 (MIGRATION - ORIENTED) へ
 - ・ 歴史の流れと社会の現状を読む。
 - ・ 自らの動機の再確認

1. では、「超教派テレビ伝道機関HTMへの地方教会の支援献金」と、「テレビ伝道で導かれた求道者の地方教会への紹介」という、“ウィンウィン”にあったHTMと地方教会の関係はどのように破綻していったのでしょうか。
2. わたしは、HTMの「聖書フォーラムとは—2. 自立への道 — 教会の病理現象 (FATIM) からの脱却」というページにある記述にヒントがあるように思います。
3. これを読んで皆さんはどのように思われるでしょうか。
4. 「なかなか斬新な取り組みだ」、「革新的なアイデアだ」、「これからの教会はかくあるべし」等々、肯定的な意見・感想もあることでしょう。
5. 一般の宣教分析の本ではそのような肯定的な評価ができるかもしれませんが、
6. 現在の、「既存の教会からの、全国規模での、HTM管轄下の聖書フォーラムへの信徒の流出」現象の事態を前にして、このリストでわたしに思い浮かぶ言葉は、
7. 孫子の兵法の中の「兵は詭道なり」という言葉です。そのころは、「戦いは、敵に手の内を見せないことによって勝利を収めることが肝要である」ということです。
8. 既存の教会のあり方を前者で表現し、「HTM→聖書塾→聖書フォーラム」のあり方を後者で表現し、前者を“病理現象”、すなわち“悪”と断定し、
9. 後者をその“悪からの脱却、解放、いやし”と捉え、「HTMの羊の囲い込み運動」に積極的に参与していくを“善”であり、
10. “神のみこころにかなう”ことであると促し、既存の教会の家族から切り離されることに対する“良心の痛み”を和らげる鎮静剤の役割を果たしているように思います。
11. わたしは、中川氏のこのような「つるバラを誘引する」ような美辞麗句は、詭弁を弄するものの—

- 12.すなわち、詭弁を弄するとは、「間違っていることに関して、特殊な理屈を使って正当性を主張する」ことです。
- 13.わたしは、既存の教会で大切に育てられた羊を、詭弁を弄して「HTML→聖書塾→聖書フォーラム」に囲い込もうとしておられるように思います。
- 14.確かに、さまざまな理由での教会間での信徒の移動というものはあります。しかし、教会間での信徒の移籍には、家族の一員としての教会員の、ある意味“養子縁組”のような責任ある、信頼関係に基づいた手順というものが存在しています。
- 15.それを、牧師も教会員も知らぬ間に、ある意味“闇に紛れて”、羊を「聖書フォーラム」に囲い込むというのは、地方教会と超教派団体の倫理に違反する“主の御前における犯罪行為”にあたるのではないのでしょうか。
- 16.わたしは、既存の小さな教会からの「HTML→聖書塾→聖書フォーラムへの羊の流出」の証しを聞いた際に、Ⅱサムエル記12:1-4の預言者ナタンを通して語られた神の言葉を思い起こし、心が痛みます。
- 17.皆さんはいかがでしょう。

第二部: その神学的核心としての「ディスペンセーションリズムの“三つの基本的命題”を使徒的視点から分析・評価する」

1. 聖書フォーラムとは一神学的基盤 1. 共生のためのABC
2. ディスペンセーション主義誕生の歴史的背景—倫理的解釈への反動としての字義主義
3. 伝統的ディスペンセーション主義聖書解釈法の最大の問題点
イスラエル民族の盛衰とその栄光の回復を神聖視・目的化した聖書解釈の構造
4. ディスペンセーション主義の牙城と言われた神学校でみられる近年の健全化の動向
5. グルーデムとスペンサーとポイスレスの分析・評価
6. 福音理解の健全化と逆流（ポロロッカ）としてのHTM
7. “逆流”の運動や教えの特徴—伝統的ディスペンセーション主義の前提の誤り
8. イスラエル民族を神聖視・目的化するD主義とイエス・キリストの人格とみわざを神聖視・目的化する使徒たちの教え

1. 聖書フォーラムの”神学的基盤” 1. 共生のためのABC

(1) 目的 (AIM)

- 神の栄光

(2) 土台 (BASIS)

- ユダヤ的視点による聖書解釈
- ディスペンセーションナリズムによる聖書解釈
- 聖書的イスラエル理解

(3) 理念 (CONCEPT) (以下の点には例外もあり得る)

- 自給伝道
- 家の教会
- ネットワーキング (ネットワーク)

1. さて、後半に入りたいと思います。
2. 公判では、B. その神学的核心としての「ディスペンセーションナリズムの“三つの基本的命題”を使徒的視点から分析・評価する」について考えたいと思います。
3. さて、HTMの「聖書フォーラムとはー1. 共生のためのABC」のページをみますと、スライドの記述があります。
4. このページの(1)と(2)の内容では、「HTM→聖書塾→聖書フォーラム」運動の“錦の御旗”として、「ディスペンセーションナリズムの“三つの基本的命題”」が掲げられています。
5. 「ディスペンセーションナリズムの“三つの基本的命題”」とは、「①聖書の字義通りの解釈、②イスラエルと教会の一貫した区別、③聖書が書かれた目的は「神の栄光」(中川健一著『ディスペンセーションナリズムQA』p.23)です。
6. 数多くの「自称ディスペンセーション主義者の方が、経緯から単に影響を受けておられるだけである」のに比して、
7. この命題を徹底することを、「HTM (ハーベスト・タイム・ミニストリーズ) →聖書塾→聖書フォーラム」運動の目標としておられるからです。
8. この“非使徒的な命題”を徹底する程度にしたがって、「使徒的福音理解」が歪められていくのです。
9. このことが「HTMによる羊の囲い込み運動」の最大の問題であると思います。
10. その意味でHTMの中川氏は、二重に罪深いと思います。
11. ひとつの罪は、「地方教会と超教派機関との倫理的関係を破壊しておられる」という罪であり、
12. もうひとつの罪は、地方教会から流出させ、HTMの聖書フォーラムに囲い込んだ羊に

「“誤った神学教育”を施しておられる」からです。

C.B. Bass,
"Background to
Dispensationalis
m"

2. ディスペンセーション主義誕生の歴史的背景—倫理的解釈への反動としての字義主義

リベラリズム

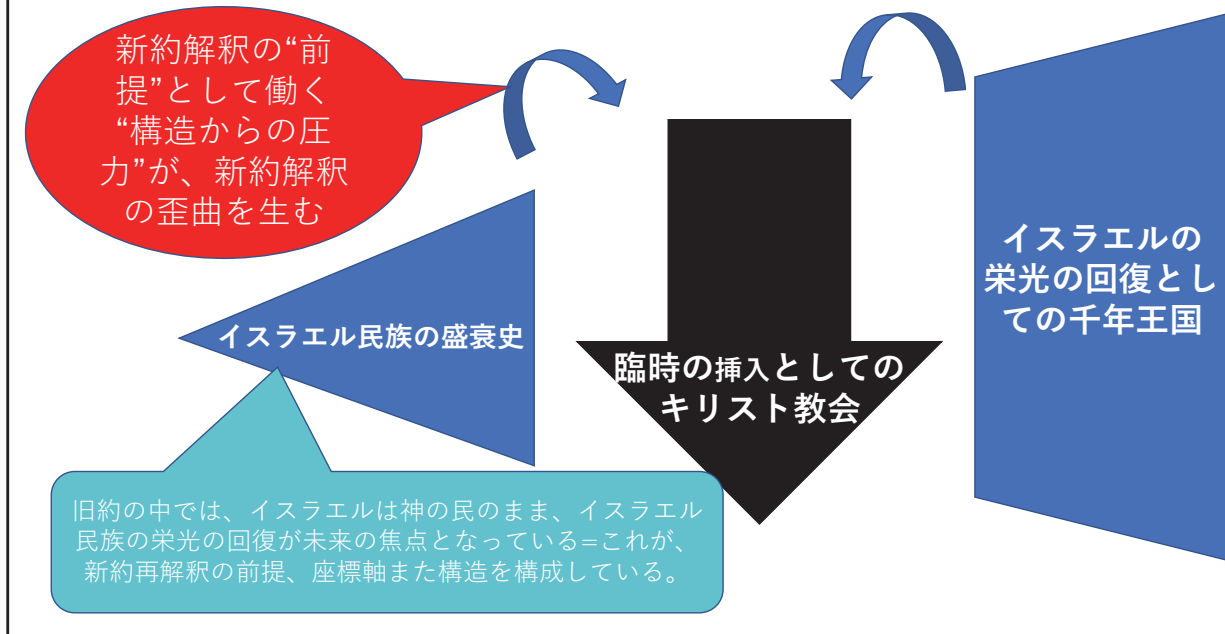
「理性」という網に掛からない
ものは切り捨てる傾向

ファンダメンタリズム

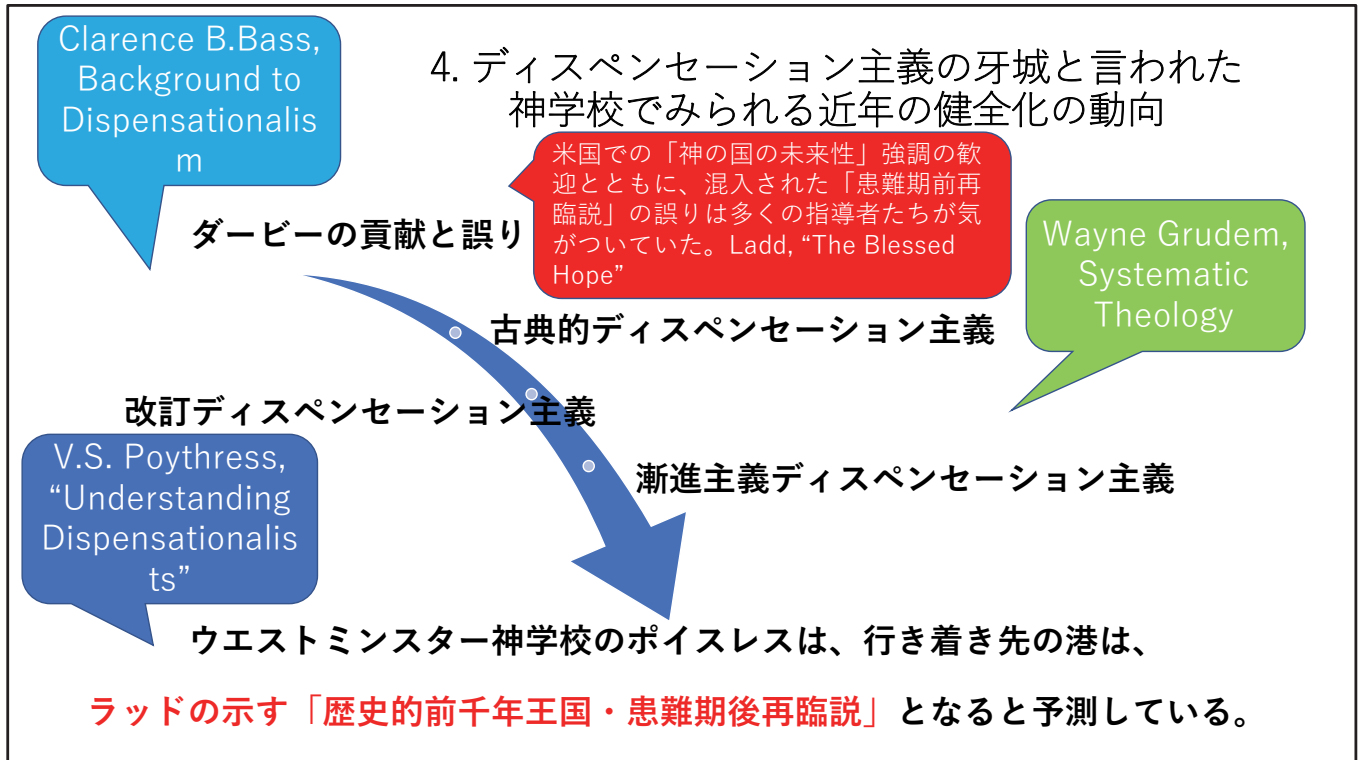
聖書のことばを「神の言
葉」として極端に字義通り
に捉える傾向

1. では、次に、なぜこのような非使徒的な、極端な字義的解釈がまかりとおったのでしょうか。それを見てまいりましょう。
2. 英国における優れた宗教改革運動とも見られたダービーたちの教えや運動が誤った方向に逸脱していく背景をみていきたいと思います。
3. クラレンス・バス著『ディスペンセーション主義の背景の, p.21. に
4. 「ディスペンセーション主義の成長は聖書の権威に対する合理主義の立場からの攻撃の増大と並行して起こった。
5. その成長へのはずみは、聖書は神のことばとして文字通りに解釈されなければならない、決して霊的に解釈されてはならないという一貫した主張であった」と記されています。
6. これも、当時からの歴史的背景、神学的背景に属することです。
7. 18世紀の啓蒙思潮を背景に、19世紀にはリベラリズム—つまり神学的自由主義が台頭します。
8. これは、聖書観において、大きな変化が起こったということです。
9. 聖書を「神の言葉」として絶対化することをやめ、「人間の手によるひとつの宗教書・倫理・道德の本」として読む傾向です。
10. 天地創造とか受肉とか、復活とか再臨とかは、「理性という網」に掛からない水となり、愛とか義とかは「キリスト教ヒューマニズムの倫理・道德」として、いわば“魚”として網の中に残るということです。
11. このような傾向に対して、聖書の言葉を「誤りのない神の言葉」として、“極端に字義通り”捉える反動が起こってきました。

3. 伝統的ディスペンセーション主義聖書解釈法の最大の問題点 イスラエル民族の盛衰とその栄光の回復を神聖視・目的化した聖書解釈の構造



1. わたしは、ラッド著『終末論』1章「聖書の預言箇所はどのように解釈すべきか」、2章「イスラエルについてはどうか」から、
2. 伝統的ディスペンセーション主義の聖書解釈法には、
3. 新約解釈の“前提”として働く“構造からの圧力”が、新約解釈の歪曲を生むようになったのではないかと考えています。
4. その構造とは、「旧約の中では、イスラエルは神の民のまま、イスラエル民族の栄光の回復が未来の焦点となっている」
5. =これが、新約再解釈の前提、座標軸また構造を構成している」ということです。
6. この解釈学的構造が「強固な解釈上のフレームワーク」として機能するときに、
7. 「神の国の未来性」に属する「千年王国・新天新地」は、「イスラエル民族の栄光回復」のイメージに染め直されます。
8. そして、それを実現するために、「キリスト教会」は、“臨時の挿入”の立場に、その地位を貶められてしまうのです。



1. 今日、「ディスペンセーション主義の牙城と言われた神学校」であったダラスやグレイス、タルボットという神学校でも、
2. 伝統的なディスペンセーション主義の教えの誤りに気づき、近年では健全化の動きが盛んなようです。
3. その動向を、バスの著書の序文を書いたスペンサーや、トリニティのグルーデム、ウエストミンスターのポイスレスが簡潔に紹介しています。
4. ディスペンセーション主義の教えは、ダービーたちの古典的ディスペンセーション主義→改訂ディスペンセーション主義、そして漸進主義ディスペンセーション主義へと変遷していっていると言われています。
5. 古典的と改訂では、まだ「神の二つの民、神の二つの計画」を保持し「患難期前再臨説」のままですが、
6. 漸進主義になると、「神のひとつの民、ひとつの計画」となり、「患難期後再臨説」にシフトしているとのこと。
7. ただ、グルーデムの分析によれば、漸進主義でもまだ「イスラエル民族を軸とする傾向」を内包している点を問題視しています。
8. ポイスレスの分析では、漸進主義もやがては「そのような中間地点」にとどまっておられず、
9. 「ラッドの示している歴史的千年王国・患難期後再臨説」においてのみ“安らぎの港”を見出すこととなると予想しています。
10. その文章が、次のスライドにあります。

5. グルーデムとスペンサーとポイスレスの分析・評価

- グルーデムやスペンサーは諸説のうち、ディスペンセーション主義者の理解については、知的に優れたディスペンセーション主義の神学者の間で、「古典的ディスペンセーション主義→改訂ディスペンセーション主義→漸進主義ディスペンセーション主義」と大きな変化を遂げていることを説明している。それで、大きな変化を遂げている漸進主義ディスペンセーション主義の、将来の「行くべき方向」について、どのように考えたら良いのであろうか。本書との関係で考えられる、興味深い、ひとつの可能性を紹介しておきたい。以下のものは、ウエスミンスター神学校のV・S・ポイスレスの予測である。「わたしは、漸進主義ディスペンセーション主義者が、古典的ディスペンセーション主義の主要な教えを乗り越え取り組んでいる研究に、深い共感と評価を表わしたい。わたしは、彼らが、以前よりもさらに誠実に聖書的真理を解明しようとしている動きをみて嬉しく思う。また、わたしは彼らの神学的営為が協調的な気風に溢れていることに敬意を表明する。しかしながら、彼らの立場は生来、不安定なままである。わたしには、彼らが、いわば長く厳しい航海の後に、古典的ディスペンセーション主義と契約的千年王国前再臨説(歴史的千年王国前再臨説: 訳者注)との間に、安らぐことのできる港を創り出し、そこに辿り着くという、可能性は低いとみている。そのような中間地点に辿り着くのではなく、彼ら自身の観察に基づく言説が動かしている諸々の力は、やがてジョージ・E・ラッドが手本として示したものを後追いさせ、ついには契約的千年王国前再臨説(歴史的千年王国前再臨説: 訳者注)に至らせる可能性が最も高いと判断している」。

読み上げる

6. 福音理解の健全化と逆流（ポロロッカ）としてのHTM

ある先生方の2010年頃からの、
母校と所属団体への“逆流”と迎合は
すさまじかった

エリクソンやラッドの著作
を活用しての静かな健全化
の取り組みから、荒野で呼
ばれる取り組みへ

ディスペンセーション主義
の大衆レベルの層: 小説
『レフト・ビハインド』等
により、さらなる悪影響

ディスペンセーション主義の知
的レベルの高い層での聖書解釈
法、教会論、終末論での健全化
の動き

「ポロロッカ」とは、潮の干満によって起こるアマゾン川を逆流する潮流のこと。
トゥピ語で「大騒音」を意味する。

1. わたしは、「HTM→聖書塾→聖書フォーラム」のディスペンセーション主義の教えの徹底を目指しておられる運動と教えは、福音理解の健全化と逆流（ポロロッカ）のように思います。
2. ディスペンセーション主義の知的レベルの高い層での聖書解釈法、教会論、終末論での健全化の動きがある中で、
3. ディスペンセーション主義の大衆レベルの先生方の層では、さらなる悪影響の広がりがみえるからです。

エリクソン著
『キリスト教教理入門』
p.439-440,444

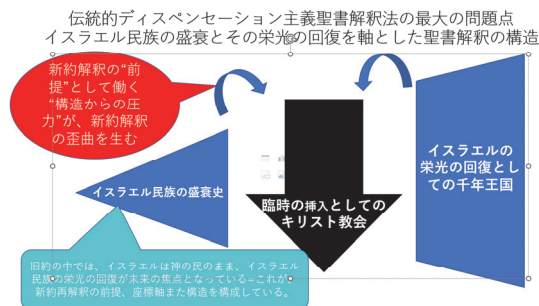
7. “逆流”の運動や教えの特徴－
伝統的ディスペンセーション主義の前提の誤り

1. ディスペンセーション主義とは、**聖書解釈方法論**である
2. その解釈方法の前提－「聖書は**文字通りに解釈**されなければならない」
3. 具体的には、「イスラエル」は教会ではなく、**国家ないし民族としてのイスラエルを指す**と解釈
4. よって、「イスラエル」と「教会」の**区別**に大きな強調
5. 現在、神は「**イスラエルを主役とする神の取り扱いのドラマ**」を中断
6. 「教会」は神のドラマ全体の中における「**幕間の挿入**」
7. 神が「イスラエルを主役とするドラマ」を再開されるとき、「**教会**」は**取り去られる**
8. 患難期は、イスラエルを主役とする**ドラマ再開の「移行期間」**
9. 千年王国は、神のドラマの主役であるイスラエル中心。著しく**ユダヤ的性格を帯びたもの**となる。

1. わたしの翻訳しましたエリクソン著『キリスト教教理入門』には、下記のように記述されています。
2. [ディスペンセーション主義とは、聖書解釈方法論である
3. その解釈方法の前提－「聖書は文字通りに解釈されなければならない」
4. 具体的には、「イスラエル」は教会ではなく、国家ないし民族としてのイスラエルを指すと解釈
5. よって、「イスラエル」と「教会」の区別に大きな強調
6. 現在、神は「イスラエルを主役とする神の取り扱いのドラマ」を中断
7. 「教会」は神のドラマ全体の中における「幕間の挿入」
8. 神が「イスラエルを主役とするドラマ」を再開されるとき、「教会」は取り去られる
9. 患難期は、イスラエルを主役とするドラマ再開の「移行期間」
10. 千年王国は、神のドラマの主役であるイスラエル中心。著しくユダヤ的性格を帯びたものとなる。]
11. 論理学では、「前提が間違っていると、結論もまた間違っている」といわれます。最初のボタンを間違えてとめると最後のボタンはとめられません。
12. HTMが錦の御旗としているディスペンセーション主義の三つの基本的前提は、①間違った聖書解釈方法論が、②間違った神の二つの民論を生み出し、③イスラエル民族中心の栄光の回復という誤った終末論を結実させているのです。これは、誤った教えの運動です。

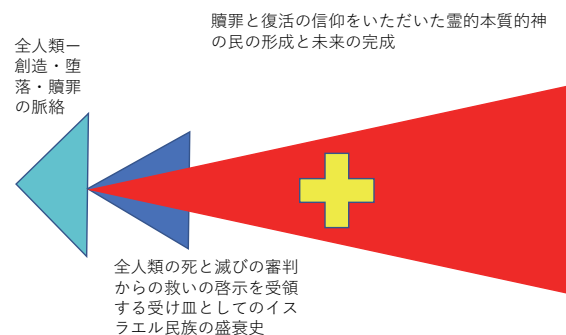
8. イスラエル民族を神聖視・目的化するD主義とイエス・キリストの人格とみわざを神聖視・目的化する使徒たちの教え

ディスペンセーション主義の基本的命題



イスラエル民族を神聖視・目的化

使徒たちの教え



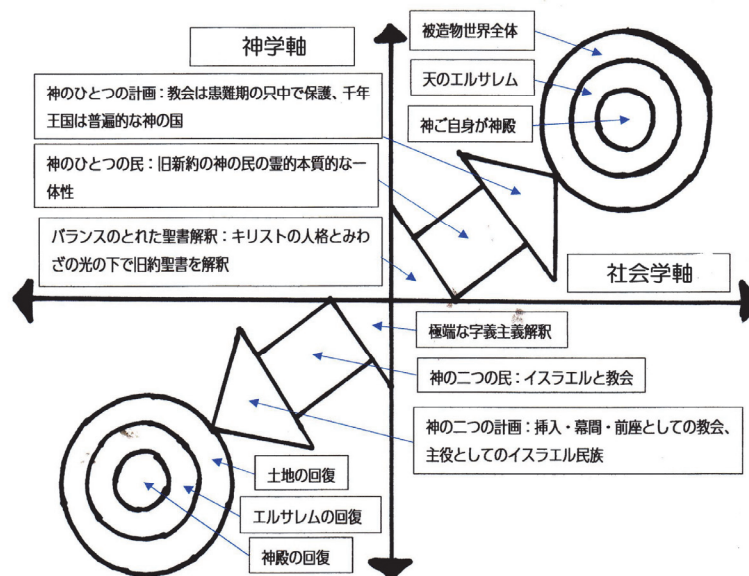
イスラエル民族を機能視・手段化

1. 信徒流出問題の神学的核心として「ディスペンセーションナリズムの“三つの基本的命題”を使徒的視点から分析・評価する」ということですが、
2. この問題で最も大切なことは、「HTM→聖書塾→聖書フォーラム」が錦の御旗としているディスペンセーションナリズムの“三つの基本的命題”は、使徒たちの教えとは異なる、ことを理解することです。
3. その意味で、中川健一氏は、テレビ伝道時代からファンやシンパ層にとっては、キリスト教メディアの「スター」のようであり、分かりやすく教えてくれる「尊師（グル）」ようですが、
4. キリスト教神学の視点から分析・評価しますと、「誤っている教えを、正しい教えのように教えておられる」ように思います。
5. 中川氏が教え、徹底しようとされている「ディスペンセーションナリズムの“三つの基本的命題”」とは、「①聖書の字義通りの解釈、②イスラエルと教会の一貫した区別、③聖書が書かれた目的は「神の栄光」（中川健一著『ディスペンセーションナリズムQA』p.23）です。
6. この命題をもう少し分かりやすく詳述すれば、ウォルブードやライリーや中川氏の主張されている“イスラエル民族”に焦点を当てて詳述しますと、「①（イスラエルという表現と民族的イスラエルを指す）聖書の字義通りの解釈、②イスラエルと教会の一貫した区別」という旧約聖書解釈法の原則とそれによって結実される「③聖書が書かれた目的は神の栄光（イスラエル民族の栄光の回復・完成）」ということになります。
7. このように“イスラエル民族を神聖視し、目的化する”命題を金科玉条（きんかぎよくじょう：人が絶対的なよりどころとして守るべき規則）として掲げられています。
8. このような教えは、使徒たちの①字義的と霊的のバランスのとれた聖書解釈、②旧新約の霊的本質的な神の民はひとつ、③聖書が教える神の国・新天新地は、民族的差異が

克服された普遍的な神の国、という教えとは異なる歪んだ、誤った教えと思います。

9. イスラエル民族を神聖視・目的化するD主義は誤った教えであり、イスラエル民族を機能視・手段化し、イエス・キリストの人格とみわざを神聖視・目的化する使徒たちの教えが、健全かつ正しい教えなのです。
10. 十分に語り尽くせたとは思いませんが、「HTM→聖書塾→聖書フォーラム」による信徒流出問題解決の一助としていただければ幸いです。足りないところは、質疑応答の中で補うことができたらと思います。ご清聴ありがとうございました。

参考までに:福音主義イスラエル論の座標軸



参考文献リスト

- C.B. Bass, “*Background to Dispensationalism*” (Wipf & Stock, 2005) p. i - iii.
- G.E. Ladd, “*The Blessed Hope*” (Eerdmans) 1956.
- W. Grudem, “*Systematic Theology*” (Inter-Varsity Press, 1994) p.859-863.
- V.S. Poythress, “*Understanding Dispensationalists*”, (Presbyterian and Reformed Publishing, 1987) p.137.
- G.E.ラッド著、安黒務訳『終末論』いのちのことば社
- M.J.エリクソン著、安黒務訳『キリスト教教理入門』いのちのことば社
- Anthony A. Hoekema, “*The Bible and Future*” (Wm. B. Eerdmans, 1979) p.194-222
- G.E.ラッド著、島田福安訳『神の国の福音』いのちのことば社
- 宇田進論稿「啓示と聖書」実用聖書注解、「教義論」「新キリスト教辞典」、「終末論」『新聖書辞典』いのちのことば社
- 岡山英雄著「患難期と教会」日本福音主義神学会学会誌31号、『小羊の王国』『ヨハネの黙示録注解』いのちのことば社
- R.ボウカム著『ヨハネの黙示録の神学』新教出版社
- 仲井隆典著『デイスペンセーション終末論の克服』アマゾン書店、キンドル版
- 安黒務著『福音主義イスラエル論』Ⅰ・Ⅱ、アマゾン書店、キンドル版
- 『ユダヤ人伝道—教会への召命』（誰もが知りたいローザンヌ宣教シリーズ No.60）」
- 宇田進著『福音主義キリスト教と福音派』いのちのことば社、p.244
- その他